
らくだの涙

クリイプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らくだの涙

【Nコード】

N2862W

【作者名】

クリイブ

【あらすじ】

案内役の男。新聞を読む河童。エレベーターの兄妹。サーベルタイガーの親子。お菓子の家の少女。らくだの涙。少年は不完全な不思議な世界に入り込み、案内役の男と出会い、いろんなことを考えたり決断したりします。*他サイトとの重複投稿になります。よろしく願います。

少年と案内役の男

正確には、迷い込んだんじゃない。

どういう道順を辿ったかは覚えてないけど、ここには自分の意思で来たような気がするんだ。

それは僕の予感でしかないんだけど、きっと当たっている。僕は誰かに無理やり連れてこられて、今ここにいるんじゃない。

「少し分かりにくかったかな？　つまり分かりやすく言うと、ここはあらゆる物事の間の世界なんだ。その物事というのは空と海だったり、0と1だったり、生と死だったりする。空と海の間。0と1の間。生と死の間。言っている意味、分かるかな？」

男はそう言ったけれど、それは嘘だ。

空と海の間には雲があり、0と1の間には0.5があり、生と死の間には何か……僕にはよく分からないけれど、何か曖昧なものがある。少なくともそれは、こんな場所なんかじゃないはずだ。

案内役を名乗ったその男は、僕の手を取って歩いた。でも僕はどうしてもその手を放したいと感じていた。

いくら慣れない道だろうと（実際その道は今まで見たどれとも違った）、転んだりはぐれたりするような年じゃない。そして誰も見ていないからといって、こんな年になつて誰かと手を繋いで歩いているという事実が何より恥ずかしかった。

「どうかしたかい？」

僕の感情を察したのか、男はそんなふうに見えなくとも、答えなんて初めから知っているように見えた。不思議なことに、僕は出会ったばかりのこの男に、なにひとつ知らないことなんてないように思

えたんだ。

以前一度だけ見たことがある有名なマジシャンのマジックショーを見たときも、僕は同じように感じたことがある。彼女は裏返しになったトランプのナンバーを次々と言い当てて、最後にはマントに隠れてそのままどこかへ消えてしまった。

「どうかしたかい？」

男の二度目の言葉に、僕は何も答えず、少し赤くなつてうつむいた。案内役の男は僕にもう何も聞いたりせずに、計ったように正確な歩幅で歩いた。

ぽっぽっぽー。

黒い煙を盛大に吐き出しながら、古ぼけ、あちこちに錆の浮かんだ機関車が右手の方を通過していった。

見晴らしのいい道に同じように古ぼけた線路がどこまでも伸びていて、僕はそちらに目をやる振りをして、男の風体を、表情を盗み見た。

男の顔は今まで僕が出会ったどの種類とも異なり、魅力的に思えた。

彼は鼻が高いような低いような、目が大きいような小さいような、それは本当に不思議な顔だった。

年齢はいくつくらいだろうか。僕より年上なのは確かだろう。痩せぎすな体型で僕より頭一つ大きく、まるで高級ホテルのホテルマンが着るような服装がよく体に馴染んでいた。

「君は……」男の言葉に、僕は慌ててじつとりと男の全体を眺めていた視線を戻す。「どうして、ここに来たの？」

僕はまた微かに視線を上に向けて、少し考える振りをしてみる。

「分かりません」やがて用意していた答えを口に出すと、何ともいえない罪悪感が、胸に広がった。

「ここはどこなんですか？」

「ここはここさ、そこでもあそこでもない。不思議なことに、『あそこ』にいる人たちは『ここ』のことをあそことは呼ばないんだ。不思議だろう？ だからここはここではないんだ」

案内役の男は初めて僕に笑顔を見せた。それは人を安心させる、特別な種類の笑みだった。

「……名前はないんですか？」

「だから『ここ』さ」

男は『ここ』と言うときに、自分の足元を指差した。そこには赤茶けた、硬い地面が広がっているだけだった。僕には男が、まるで何かの役割を演じているかのように見えた。

それからしばらく、僕は周りの景色を見ながら歩いた。そこには見たことのあるものがあり、同時に見たことのないものがあつた。

空を飛ぶ古い戦闘機は、何キ口にも渡ってここから見える限り細長い飛行機雲を残していた。

『2001年宇宙の旅』で見たことあるような黒い長方形の壁が等間隔でまるで列を作るように並んでいた。

西部劇に出てくるような、娯楽といえば酒場しかないような小さな街がひっそりと佇んでいた。

空からは、巨大なプラノドンの模型がぶら下がっていた。それは博物館に飾ってあるようなものでなく、デパートのおもちゃ売り場にぶら下がっているようなチャチなものようだった。まん丸の目は気味悪く、口は微かに笑っているようだった。

ここは僕の夢の世界なんだろうか？ だって僕が知っている

現実の世界には、こんな風景、どこにも存在しているはずがないんだ。

僕はそんな不思議なものを見る度に小さな声で驚き、男の横顔をちらりと覗き見た。彼は表情を変えることなく、ただ前方だけをまっすぐ見つめて歩いていった。

そんな現実味の薄れた場所を約一時間半（僕にはそのくらいに感じられた）ほど歩いた。ようやく目的地らしき建物が見えてきた頃には、辺りは暗くなり始めていた。

どうやらここでも、夜になると日が沈むみたいだ。それはきつと当たり前なことなんだけど、僕には何が当たり前で、何が当たり前じゃないのかすら分からなくなっていた。

曲線的な造りの、バニラ色のその建物は、僕にお洒落な図書館を思わせた。三階建てくらいだろうか。少なくともそれは、この世界では比較的まともなものの一つに感じられた。ただ不思議なことに、その建物には窓が一つもなかった。

「ここで一度お別れだ」建物の大きさの割に小さな、両開きの扉の前で、案内役の男は言った。

そうして僕は初めて男の顔を正面から見た。男の魅力的な顔も僕を正面から見つめ、僕はまた少し赤くなってしまった。

「入れないんじゃないかと、入らない。これは僕の意味なんだ」男は確認するように言うと、去って行った。

僕はその姿が見えなくなるまでじつとを見送って、ずっと男の手を握っていたせいでまだ少し暖かい手で扉を開けた。

少年と花魁と河童

中には当然、ずらりと並ぶ本棚も、声を潜めて話す子どもたち、勉強をする学生もいなかった。当たり前だ、ここは図書館じゃないんだから。

僕を出迎えたのは、茶を基調としたホテルのロビーのような部屋、そこに規則的に並ぶ赤いソファ、そして、右腕の無い着物の女性だった。

「ようこそ」女性は言う、とても気だるげに。

僕が小さく頭を下げると、真っ赤な着物の女性はにこりと笑った。真っ赤な唇の形が緩やかに変わる。それはとても成熟した笑みで、僕はぞくりとしてみまう。

複雑な髪の色を保つ金色の髪留め、胸とお腹の間で結んだ着物の帯、左手の煙草、唇。僕は彼女を形作るそれぞれを、見るともなく、こっそり観察した。彼女はとても綺麗な女性だった。

「あなた、ここに来るのは初めてよね、手続きをするから、しばらくその辺りで待って……」女性の言葉は早口で、最後の方はよく聞き取れなかった。

着物の女性は足音を立てずに立ち去った。まるでどこかに忘れてきたみたいに、右の二の腕の辺りから先は空白で、よく見ると彼女は裸足だった。

手続きがどういうものなのか知らないが、僕は言われた通りに待つことにした。それ以外、僕にできることはない。

僕は入り口に近い赤いソファに腰を下ろした。僕の向かいのソファには、僕が今まで見たことのない生物が、座って新聞を読ん

でいた。

新聞を持つ薄い水かきの付いた両手は、絵の具をぶちまけたような緑をしていた。

その緑は足の先から新聞の下から覗く性器まで、ずっと変わることなく続いていた。つまり、彼の体は緑色だったんだ。

その生物の特殊性に関わらず、僕はどうあっても男（雄）というべきだろうか？）の前に座っただろう。

だって僕は何も知らないんだ。僕がここにいていいのか、そうではないのかも。僕は誰かと話をする必要があった、僕は誰かに話を聞く必要があったんだ。

僕に気づいた男は丁寧な新聞をたたみ、僕を見た。僕の予想していた通り、男は河童だった。

この建物に入ったときから、その男の緑は目を惹いた。ソファーには何人も座っているわけではなかったので、僕はすぐに気が付いた。あれは河童だな、と。

あれは河童だな、と？

その感情を思い返して、僕は自分の中の違和感に気付かずにはいられなかった。

ここに来てからというものの、僕は胸にぽっかりと穴が開いたように、いろんな物事を感じにくくなっているみたいだ。

だってそうじゃないか、普通は河童を見かけたら、もつと恐ろしい気持ちになったり、驚いたりするものだろう。でも今の僕は、あれは河童だな、だ。

「珍しい客だ」河童は僕の思考を遮って言う。どこか異世界から響いてくるような、透き通るような声だった。「とても珍しい客のようだ」

河童は綺麗な目をしていて、筋肉質だった。人間でいうと唇に当たるのだろうか、黄色いその部分はアヒルのようで可愛かった。河童の言葉が聞き取りにくいのは、あるいはその唇のせいなのかもしれない。

「僕は今日初めてここに来ました。ここは、何なんですか？」

「それを知る必要があるのかい？ 君は客としてここに招かれた。それでいいと思うんだが」

河童と僕は向かい合って話をしている。これはとても不自然なことのはずなんだ。

「知りたいんです」

「ここは君のための世界かもしれないし、そうじゃないかもしれない。もしそうじゃないのなら、これはとても残念なことだ。でも私にはそれはどうすることもできない。私にはここが君のための世界だと、願うことしかできない」

河童は澄んだ目で僕を見つめている。河童に見つめられる僕はいつの間にか背中に冷たい汗をかいていた。今さらながら、僕は少し彼のことが怖くなっていた。

「一つだけ忠告しておく、ここを出るなら早い方がいい。ここの一部になってしまつから」

結局、質問には答えてもらえなかった。それにしても『この一部になるって』って、どういう意味なんだろう？

しばらくして着物の女性が鍵を持ってやってくるまで、河童は僕に取り留めない質問（例えば僕が住んでいた場所のことだったり、僕の家族のことだったり）をして、それに飽きるとやがて新聞を読

み始めた。

その新聞にちらりと目をやるけど、僕にはそこに書かれた内容を、何一つとして理解することができなかつた。

着物の女性に、僕の部屋は二階の一番奥から二番目だと説明された。僕がしなければいけないのは、まずその部屋に向かうことだろう。その後のことは、それから考えればいい。

ソファーには他にも、人間を含む三人の生物が座っていて、僕はそんなものを横目で見ながら、入り口の正面にあったエレベーターへと向かつた。

僕は彼らの間をいつも通り歩くことができなかつたけど、誰もがそんなことは気にしなかつた。

普通の部屋での少年の短い考察

二階へと上がるエレベーターの中で、僕は不思議な体験をした。エレベーターに乗ろうとすると、先に二人の子どもが乗っていた。エレベーターの表示は一階で止まっていたから、きつと、ずっと乗っていたんだろう。

兄妹だろう。二人はとてもよく似ていた。男の子が兄で、女の子が妹だ。二人は僕が乗ったことも気にしない様子で、狭いエレベーターの中でお互いのことを追い掛け回していた。

きゃきゃつ、そんな声を出しながら二人はやがて僕の周りをぐるぐると回り始めるので、僕も思わず笑ってしまう。

僕は手を伸ばして二階のボタンを押した。エレベーターが動き出し、僕の前を通って妹、兄の順に僕の後ろに回っていく。

やがて振動が止まり、エレベーターは二階に到着した。二人の声が聞こえなくなっていることに気づいて僕は後ろを振り返ってみるけれど、幼い兄弟の姿はもうそこにはなかった。

エレベーターから忽然と二人の子どもが姿を消すのをまのあたりにしても、僕は驚かなかった。僕はただそのことに対して、ほんの少し驚くのがあった。

部屋は普通の部屋だった。これといった説明の必要ない、シングルベッドと、トイレと小さな風呂の付いた部屋だ。まるでビジネスホテルみたいだ。ただ一つおかしな所といえば、その部屋には窓と鏡がなかった。

その部屋は息苦しく、何だかそわそわとした印象を受けた。部屋というのは窓がないだけで、こども受ける印象が変わるものなんだろうか。それとも、僕が気づいていないだけでどこか普通の部屋と違うところがあるのだろうか……。

ほとんど無意識のうちに、僕はベッドに横になっていた。そこで初めて、自分がひどく疲れていることに気が付いた。右手を顔に当

てて、僕はゆっくりと目をつむる。

「ここはどこで、僕はどうしてここにいるんだろう？」

『この一部になる』僕はさっき河童の言っていた言葉を思い出した。僕はここの一部になるために来たんだろうか。それは僕自身の意思で？

「こつも考えることができる。僕はもう死んでしまっていて、ここはそういう場所なのかもしれない。つまり死んだ人間や、自分が死んだことに気づいていない死者が集まって形作る場所だと。」

それともこれは夢で、目が覚めるとこんな世界のこととは全て忘れていたのだろうか。

「だったらこれは僕が妄想の中で作り出した世界ということも、有り得ないと言い切れない。」

正しい答えなんて、本当はどこにも存在しないのかもしれない。

この世界の、どこにも。

少年のこと、喪失

(声)少年)

少年は特に目立つ子どもではなかった。

運動が得意というわけでも、勉強ができるというわけでもない。友達が多いというわけでも、いじめられるというわけでもない。月曜日から金曜日まで、朝が来れば学校へ行き、学校が終われば家へと帰った。

同じ年代の子どもと同じように母親のことを疎ましく思い、母親の言うことの多くに反抗した。そんなとき母親はいつも激しく少年のことを叱り付け、その後決まって少し寂しそうな顔をした。父親はいなかった。

少年は図書館が好きだった。図書館で本を読んでいると、自分は他の何者とも関係なく生きているような気分になった。

自分がこのまま消えてしまっても、誰も気付かないかもしれない。少年は本を読みながら、そう考えることがあった。それは自虐的であり、とても愉快的想像だった。

少年は自分の人生に不満を感じているというわけではなかった。

ある部分では諦め、ある部分では達観し、そうやって現実に折り合いをつけていくのが比較的うまかった。こんなものだろう、少年はどんなことがあっても、そうやって多くの出来事を受け入れるようにして生活してきた。

かといって自分の人生に満足しているというわけでもなく、自分が世界から必要とされていないという意識は重石となり、常に満たされない感覚となって胸の中にいつも晴れることなく存在した。

「僕は何のために生きているんだろう？」少年は何度か自分に問いかけることがあった。

答えは出なかった。

少年は自身に異端を感じて生きていた。

僕は右腕に異変を感じて目を覚ました。

「ぐああああああつ」と、起き上がった僕の口からは驚きと恐怖の呻き声が漏れた。

右の二の腕から指先までが、まるでそれ自体が熱を放っているかのように、ひどく熱かったのだ。

例えば熱が出たとき、全身から熱を発して体温が上がるけど、それが右腕一箇所に集中したみたいだった。温度も熱が出たときよりずっとずっと高い。

そのせいか、僕の額には大量の汗が滲んでいて、ひどく喉が渴いていた。その渴きは、まるで砂漠を何時間もさまよった後のような渴きだった。

僕は風呂場へ行くと、備え付けられた洗面所の蛇口から直接水を飲んだ。同時に熱湯に浸けられているみたいに熱を持った右腕を、左手で血が止まるほど握り締めていた。

ある程度喉の渴きが癒えると、僕はさらに蛇口を左にひねり、激しく流れる水の中に右腕を差し出した。

そして激しく顔をしかめた僕はようやく、ほんの少しだけ落ち着いて、大きく息を吐き出すことができた。僕はいつの間にか肩で息をしていたようで、いつからか目の前の景色は霞んでしまっていた。

冷たい水を受けてもほんの気休めにしかななかった。右腕の熱は冷めることなく、むしろ痛みすら伴って僕を苦しめ始めていた。

「僕に、何が起きているんだ？」

不安や焦燥がごちゃ混ぜになったような胸の中で、僕が考えられることなんてほとんどなかった。ただ僕を襲っている『理不尽』に対する怒りだけが、今僕が正確に認識できる唯一の感情だった。

「そもそも何なんだ、この馬鹿げた世界は！」僕は右腕を押さえていた左手を放して、思い切り壁を殴りつけた。

熱はもはやどこか腕と脳の中の神経で完全に激痛という信号に変換されてから脳に伝わるようになっており、僕は右腕を抱えるようにして獣のような叫び声を挙げ、その場に倒れこんでしまった。

洗面台で弾かれた水滴が僕の体に落ち、体中にかいた脂汗と、流れる涙と混じり合う。

本当に激しい痛み、経験でしか伝わらない、負の感覚だった。強く握り締められ、水に濡れた右腕は血管が浮き上がっていた。

「どうして僕が、どうして僕がこんな目に遭うんだ？ おかしいじゃないか。僕は何も求めていないはずなのに、僕は何も望んでいないはずなのに、僕は……」

僕の右腕はそうやって色を失い、少しずつ薄くなって消えてしまった。

河童の忠告

「痛っ！」

洗面台をつかもうとして、僕は地面にしたたかに肩を打ちつけた。洗面台をつかんだはずの右腕に目をやろうとしたけど、ほんの少し前までそこにあったはずの右腕は、もうそこには見当たらなかった。

僕は右腕という器官を失った。鏡がないから僕自身の全体像を見ることができないけれど、肩から先の空白を眺めていると僕は自身にひどくがらんとした印象を受けるのだった。まるで親友を失ったみたいなの、親友を失うという感覚は、僕には分からないのだけだ。

何とか片手でふらふらと立ち上がり、片手で軽く顔を洗う。片腕を失いながらもどうの僕は、まるで烙印を押されてしまったみたいに、体のあちこちに見知らぬ空虚さを覚えていた。

体がだるいのは少し違う、体の節々から魂が向け落ちたというか……、とにかく妙な感じだった。

これからどうすればいいんだろうか。そんなことを考える僕は、本当に、本当の意味で一人ぼっちになった気分だった。

特に考えがあったわけじゃないが、とりあえずロビーに下りてみることにした。この世界で僕の知っている場所はこのロビーと、この部屋だけだったし、何かしていないと本当に自分が消えてなくなってしまうそうだったんだ。

それに、これ以上この部屋にいたいとはどうしても思えなかった。片腕で上手にバランスを取りながら廊下へ出る。慣れるには、もう少し時間がかかりそうだった。

エレベーターの呼び出しボタンを押し、一階から上がってきたエレベーターに乗ると、僕はまた兄妹に出会った。二人はすぐに僕の

右腕の変化（変化と呼べるかは知らないけど）に気が付いたようだった。

「だいじょうぶ？」

「大丈夫だよ」僕は兄の方の言葉に、努めて優しく答えた。

「ごめんなさい」妹の方は、今にも泣き出しそうだった。その謝罪の意味を少し考えてみる。

「いいんだ」よくはないが、僕は言った。「いいんだよ」

二人は僕の右腕があつた場所に手をやった。不思議と少しくすぐったい気がして僕が肩を動かし架空の腕を移動させると、二人は架空の腕が移動した場所にまた手をやってから笑った。

「僕の右腕は一体どうなつたんだろうね？」

何かを期待していたわけじゃないけれど、僕は彼らにそう聞いた。もし隣に乗っていたのが天狗でも総理大臣でも、僕は同じことを聞いたことだろう。

「わからない」二人つきりの兄妹は弱々しく、ただ首を振るだけだった。

「そうだよね」僕はそう言って彼らに笑いかけると、エレベーターを降りてロビーへと入った。

この世界には時計がなかった。つまり今はおそらく十二時前後だろうと、想像するしかない。

照明の絞られたロビーには、河童と僕だけがいた。

河童は僕の右腕があつた場所を（まるでそこに何かが存在するかのように）しばらく見つめていた。河童の表情は険しかった。その表情はまるで、これから僕に降りかかる不吉な何かを、物語ってい

るみたいだった。

「君はここを出るべきだ」

僕は河童の細い目を見た。彼の目を見つめると、感情がほころび、今にも溢れ出してしまうようなのを必死で抑えなければならなかった。僕は言う。

「僕にはいろんなことが分からなくて、どうにかなってしまいそうなんだ」

「例えばどんなことが？」

「もちろん今一番気になるのは、僕の右腕のことだ。どこにいったんだろう？ 着物の女性が関係しているのかとも思ったけど……彼女も同じように右腕が無かったから。でも僕の右腕がなくなっただけ、誰も僕のそばにはいなかった」

河童もすっかりと僕を見つめていた。彼はそれで、と先を促すような目をしていた。

「姿が見えないようだけど、彼女はどこへ？」

「彼女が君の右腕を奪ったとすれば、その腕を持って逃げたのかもしれないし、消えたのかもしれない。可能性は低いがそうして元の世界に帰ったかもしれない。ひよっとすると明日またこのロビーにいるかもしれない」

目の前の河童は『ここ』のことをどのくらい知っているのだろうか。そんなことを考える僕は、河童の首元に斑点があることに初めて気が付いた。彼は存在するはずがない、本物の河童なんだろう。

「一体ここは何なんですか？ 僕はここに来ておかしなものばかり

見ているし、おかしいことばかり経験している。ここは、僕の知っている世界じゃあない」

河童は何も答えない。だから僕は続ける。

「こんなことを言ったら失礼になるかもしれないけれど、僕の知っている世界に河童はいなかった。あなたはどこから、どうやってここへ来たんですか？」

河童は僕から視線を逸らし、やがて諦めたように答えた。

「私は君が元いた世界、君と同じ場所からここにやってきた。そして、私は来たくてここへ来たわけじゃないんだ。だからといって、連れてこられたというわけでもない」

「このことをよく知ってるみたいですね」「知識としてはある程度知っているけどね、経験としてはほとんど知らないのと同じだよ」

その言葉の意味を考えながら右手で鼻を掻こうとして、その腕がもうそこにないことを思い出した。

「とにかく肝心なのは、君は右腕を失ったことで、よりこの世界に近くなったということだ」

「そうかもしれませんが……確かに、そんな気がします」

こここの空気に馴染むというのだろうか、僕は河童の言うとおり、案内役の男とここを歩いた数時間前よりも、よりこの世界に近くなっていることを実感していた。それは実感という言葉でしか言い表せない、奇妙な感覚だった。カメレオンが背景に溶け込んでいく気持ちだが、もしかするとこんな気持ちなのかもしれない。

「君はこの世界でも特別な存在だ、機械の誤作動のようなものなんだ。君は何をするにしても気を付けなければいけない。これからは注意しすぎても、しすぎるといふことはないんだよ……」

長い沈黙が訪れた。とても静かで、まるでどこかで、大きな掃除機で音を吸い取っているみたいだった。

「少し頭を冷やしたいんだけど、どこかいい場所はないかな。もしこの建物から出られるなら、ということだけねど」

嘘だった。僕はできることなら、しばらくはあの部屋に戻りたくはなかったんだ。そして頭を冷やしたいということもまた、事実だった。

「君が案内役の男と来た道と反対側にしばらく歩くと海がある、そこに行ってみるといい。道を外れないように気を付けて」

「ありがとう」僕はそう言って立ち上がる。

「ここには、自分の意思で来たような気がするんだ」

去り際に、僕は河童にともなく、つぶやくようにそう言った。それを聞いた河童が哀しそうな表情をするので、僕も少しだけ、悲しくなった。

波のない海

海に着いた。

でも僕はそれのことを本当に海と呼んでいいのかよく分からなかった。呼び方なんて、ここでは大して意味はないんだろうけど。

その海は気が狂いそうなほど黒く、静かだった。あまりにも静かで、僕はここに来る途中で道を間違えてしまったんじゃないかと思っただけだ。それは海なんかじゃなく、何か大きな黒い塊のようなものに見えた。

とにかく僕は河童の行ったとおりに歩いて海を探すことができ、波のない海というものが存在を知った。

波のない海、それはひどく気味が悪いものだった。真つ暗で確認することはできないけれど、ひよっとして水は濁って緑色をしているかもしれない。それとも、ここでは自然の水が綺麗なまま、一箇所にとどまり続けることができるのだろうか？

なんにしる僕はその黒い海面を見つめて、ある程度気分を落ち着かせることができた。少なくとも、混乱せずに自分と向き合うことができた。

「さて」

寂しくなった僕はそんな声を出す。それはすぐに暗闇に吸い込まれていった。音を吸い込む掃除機が、ここでもしっかり仕事をしているようだ。

僕が落ち着いて考えたかったのは、まずこれからどうするかということ。そして、ここが一体どういった世界かということだ。

他にも細かい疑問があるにはあったのだけど、本質的に重要なのはきつとこの二つの事柄なんだろう。僕はただこの二つの疑問に答えを出せばいい。

一つ目の疑問、僕がこれからどうするべきかというものに対しては、比較的すぐに（この場所では時間という概念が決定的に欠落していたけど）答えが出た。

僕はもつとよく、『ここ』のことを知らなければいけない。河童はすぐにでもここを出たほうがいいと言っていたけど、僕は明日、このことをもつとよく調べてみようと思う。

ここにあるもののいくつかに触れ、ここにあるもののいくつかを観察してみたいと思った。ここを出るのは、それからでは遅すぎるだろうか？

だけどその作業は、きつと僕にとって必要なものなんだろう。親切な河童の言うことを聞くだけでなく、自分で何かを判断して行動するためには、（それがどれほど些細なものであったとしても）情報が必要だ。

僕は左手で右の肩を撫でながら、顔を上げた。

波はなかったが、そこには風があつて、微かに潮の匂いがあつた。僕は砂浜に横になるうかと考えたけど、少し考えてやめておいた。

こんな場所でも服や体に砂が付くのを嫌う自分が、少しだけおかしかつた。

二つ目の疑問、ここがどういう世界かということについては考えるうちに、確信は持てないにせよある程度察しはつきはじめていた。でもいくらそのことについてそれ以上考えても、その事実を決定づけることも否定することもできなかった。僕は靴で砂を集めてはそれを蹴り飛ばしてまた靴で砂を集めてを繰り返した。

だってそこは本当に静かで、何かしていないとどうにかなってしまいそうだったんだ。

やがて足を止めると、いつからか隣にいたサーベルタイガーの親子と並んで、しばらく満天の星空を眺めてみた。

それは僕の知らない星空だったけれど、雲ひとつない、本当に綺麗な星空だった。こんな綺麗な星空は、もう二度と見る事ができないかもしれない。

少しだけ、自分が特別ななにかになったような気がしていた。

お菓子のお家の少女

朝がやってきた。星々は地面の向こうに沈み、太陽が昇り、周囲が明るくなっていく。それは僕のよく知っている普通の朝だった。

自分の部屋には窓がないため、僕はホテルの外に出てその光景を見た。遠く道の向こう側には、昨日目にしたプラノドンの模型が小さく浮かんでいた。

「僕はもっとこのことを知りたいと思う。ここを出るのは、それからにしたいんです。きっとどこかに、僕がこの世界にきた意味があると思うから」

朝食を食べ終わり、ロビーでコーヒーを飲んでいる河童を見つけると、僕は向かいに座ってからそう言った。

「そうか」そう言って河童は水かきのついた手で器用にコーヒークップをテーブルに置いた。コーヒークップはことりとも音を立てなかった。「でも、あまり時間はない」

「分かっています。それで……、もし知っているなら教えてほしいんです。もしこの世界に、僕が見ておくべき場所や、知っておくべきことがあるのなら」

河童はじつと僕の目を見ていたけれど、やがて諦めたようにゆっくりと首を振ってから、言った。

「君が昨日行った海に沿った道をずっと進んでいけば、やがて海から離れていき、今度は森の中へとつながる道になる。その道をまっすぐ進めば、森の中にひらけた土地があり、そこに建物が建っているのが見えるだろう」

僕は河童が言っていた通り、昨日サーベルターガーと星空を見上げた海へと向かった。

波のない海は昨日と変わらずにそこにあった。海は綺麗な青色で、見る限りその中に生き物の姿は見えなかった。砂浜にもどこにも、僕以外の生き物の姿は見えなかった。

僕はそのまま海沿いの道を歩き続ける。ただ微かに漂う潮の匂いだけが、この道を海沿いの道だと意味づけているようだった。波のない海は、あまりにも海らしくなさすぎる。

数十分も歩くと、道は海から離れたし、草原に挟まれた見通しのよい道へと変わった。

およそ五キロ先には、目的の森であろう木々が深く茂っている場所がここからでも見ることができ、そこだけほかの場所よりも緑の色が濃くなっていた。

「ただそこに行くと、ここについてより多くのことを知ることができるかもしれないが、君にとって辛いものを見なくてはならないかもしれない。だがそれはどうしようもないことなんだ、君にとっても、私にとっても……」

森に向かって歩く僕は、河童が最後に言っていた言葉を頭の中で反芻していた。彼は一体何を言いたかったのだろうか？ 森の中の建物に、一体何があるというのだろうか？ 僕は無意識に左手で右腕をつかもうとして、またしても失敗してしまう。

森に入る直前に、一箇所だけ分かれ道があった。その舗装された道はずっと、遠く細く伸びていき、その先には大きなテーマパークのようなものがあるのが遠目にも分かった。

テーマパークにはいくつかのアトラクションのようなものと、その中央には観覧車があり、その観覧車が動いていることが、数十秒

そこを見続けることによってようやく僕には分かった。僕は森の中へと入っていった。

森は薄暗かったけれど、自分が歩くべき道ははっきりと見えだし、それ以外に見るべきものは何もなかった。

ただまるで侵入者を拒むかのように所々で木が倒れていたり枝が伸びていたりして、僕は今までのようなペースで歩くことはできなかった。

やがて森がひらけて、河童の言っていた通り一軒の建物が現れた。

「これは……」

そこに現れたのは、お菓子でできた家だった。何年も前にヘンゼルとグレーテルが迷い込んだ、あのお菓子でできた家だ。

家のそばまで近づいた僕は、巨大な硬いクッキーでできた扉の前に立ち、戸に付いたキャンディーの輪っかを掴んで戸を叩いた。

「ちょっと待って、今出るわ!」

そんな声が聞こえたかと思えば、扉が勢いよく外側に開いた。家の中に立っていたのは、十歳くらいの少女だった。それはこの世界で初めてみた、まともな姿をした人間だった。

「お客様は七年ぶりね、どうぞ入って」彼女が笑顔で言うので、僕は彼女に付き従って甘い匂いを発する家の中へと入った。

テーブルの上に載った二つのコーヒーカップ、その中に注がれたココアを挟んで、僕らは向かい合った。

河童ではなく普通の少女と向かい合う感覚、その感覚を僕は確かに懐かしいと感じていた。

「君はさつき、お客様は七年ぶりって言ったよね？ 君はこの家に、もう七年以上住んでいるっていうの？」

「そうよ、あたしはもう十一年もここ暮らしているの」

「君は……いくつなの？」

「あたしは今年で十歳よ」

そう言うてはにかむ少女は、嘘を言っているようには見えなかった。

「君はどうしてこんなところで一人で暮らしているの？」

「あたし……この森から外に出られないから。この家のほかに暮らせる場所がないの」

「どうして？ 僕はやっぱりこの世界から、外に出ようと思うんだ。君も一緒にここから出よう、この森から抜け出して、この世界から抜け出そう」

「……無理よ」

「どうして？」

少女はじっと俯いて、やがて僕の右腕（があつた場所）に目をやった。

「あたしがまともな姿をしているから。あたしがこの森から出ると、誰かがあたしの体の一部をどこかへ持っていかうとするの。だからあたしはこの森から、この家から出ないわ。それに、ここを出たつてどうせあたしは一人なんですもの」

少女は頑なだった。胸を襲う痛みを耐えながら、僕は黙って踵を返すことしかできなかった

息を切らして戻ったロビーに着物の女性はいなかった。代わりにとても体格のいい、大きな鼻が魅力的な女性が扉を開けて入ってきた僕を迎えた。

ソファーには河童が座っている。ソファーからは緑色の肩と頭が覗いている。僕にはそれが永遠に変化しないことの一つのように思えた。

僕は今まで何度かそうしたように、河童の目の前のソファーに腰掛けた。

河童は僕の言葉を待っているかのようだった。もしかすると僕がここに来る前から、そうやってずっと僕の言葉を待っていたのかもしれない。

「ここは現実世界から、色々なものが逃げ込んでくるような場所なのかな。行き場を失った不完全なマイノリティたちが。だから、僕や少女の体の一部を奪って『ここ』の一部にしようとする」

河童は僕の言葉が含んでいる意味を取り出すように、しばらく上を向いていた。

「その英語は知らないけれど、君の考えは正しいんだろう。もう君に隠す必要もないんだろう」

河童の言葉を待つ間に、エレベーターからは二本足で歩く大きな黒猫が下りてきた。女性は僕のとくと同じように、またそれを丁寧に迎える。

「ここは君たち人間にとって、現実の世界に必要なもの、適応

できないもの、排斥されたものたちや、その概念が集まって形をもつてできている。それは例えば異形の生き物だったり、必要とされなくなつた架空の存在だったり、絶滅してしまった動物だったりする。分かるかな？」

僕が頷くと、河童は満足したように更に続ける。

「そんなものが集まって、向こうの世界の真似事をして世界を形作っているんだ。それはほとんどが不完全なものでしかないんだけど……」

「不完全なものが集まって不完全な世界を作っている？」

河童はそこで、少し黙つた。大きく息を吐いてから、やがて少し躊躇うようにして、また話を始めた。

「らくだの涙の世界なんだ」

「らくだの涙？」

「これは私に『ここ』のことを教えてくれた人の例えだけど、らくだの涙が集まってこぶのないらくだを形作っているようなものなんだ。」

らくだが深い悲しみに沈んでも、それは人間にとつては、『なにもない』と同じことなんだ。そんな『なにもない』が集まって、また『なにもない』のと同じような、不完全な世界をひっそりと形作る。これはひどく滑稽で、やり切れないことなんだよ」

「でも僕はこうして生きているし、異形の生き物でも、らくだの涙でもない」

「ひよつとして君は、自分のことをそんな風に思っていたんじゃないの？」

何も答えられない。僕は砂漠でひとり、涙を流すらくだを想像し

て寂しい気持ちになる。

「森の中には一人の少女がいた。彼女はもう十一年も、あの暗い森で一人、暮らしているらしい」

「彼女と君は同じなんだ。彼女のことは……何度も言うけど、私たちにはどうしようもない。」

それより大切なのは、君はここにこれ以上ではいけないってことだ。ここに長くいるとこの一部、この世界を形作る一部になって、二度と元の世界には戻れない。私はここに来たばかりだが、それを実感している。もう私はここから出ることはできないんだ」

僕にはそれがひどく悲しいことのように思えた。

「あなたには、僕がどんな形に見える？」なんとなく、僕はそう尋ねてみた。

「君は右腕のない人間の形をしているよ。でもここでは形はあまり意味がない。ここに鏡はないし、そんなものが存在する意味がないんだ。だって私はもともと、概念でしかないんだから」

「……」

「君は私みたいな概念の集合じゃなくて、ある個としてここに来た。森の中の少女と同じように。これは特別なことだ、いつか言ったように、機械の誤作動なんだ」

僕にはよく分からなかった。あらゆる言葉が、まるで意味を持たないように僕の脳の中を通り抜けていったんだ。ここでは、言葉は実体よりも重要な意味を持つことのはずなのに。

「とにかく手続きをしないとここから出られない。詳しいことは彼女に聞くといい」河童はそう言って、体格のいい女性を指差した。

ここはとても曖昧で、不自然で、不完全な世界なんだろう。覚悟が揺らぎそうになったので、僕は慌てて立ち上がって女性の下へと向かった。

簡単な手続きと別れ

手続きは紙に自分の名前を書くだけだったけど、僕はそれを思い出すまでかなりの時間を必要とした。

それはまるで自分のものではないかのように僕の頭の周りをゆらゆらと漂い、その尻尾を捕まえるのは本当に容易なことじゃなかった。

「案内役の男に気を付ける」別れ際に、河童は言った。

「どうして？」彼が何か僕に危害を加えるとは、僕にはどうしても思えなかった。

「異端者なんだ。彼はきつと向こうの世界との行き来が多すぎて、余計なことを考えるようになったんだろう。彼はこの一部だけどころの一部じゃない。彼は、もうどこにも属さないものになっている。そのせいか、多少おかしな言動をするときがある」

「つまり……」

「簡単に言つと少しおかしくなってしまうてるんだ」

河童はそう言つて、自分の皿の乗った頭を指差した。それは毎日磨かれているようにきれいで、僕は少しだけ見とれた。

「彼はここが、あらゆる物事の中間の世界だと」

「中間の物事の多くは排斥されてきた、彼自身だつてそうだ。でも彼は、まだ案内役の男としてここでは必要とされている。必要とされなくなつて、完全にこの一部になることを恐れている。ここでは誰もがこの一部になるというのに、彼だけはそのことをひどく恐れている」

僕にはそのことが、とてもかわいそうなことに思えたんだ。誰に

も必要とされないものとして逃げて来た世界で、さらに異端者となるのはどういう気持ちなんだろう。らくだの泣き声はここに来れば救われなきゃいけないのに。

「彼は今どこに？」

「君が必要とすれば、彼はそこにいるよ」

河童はその緑の手を小さく振って、僕を送り出してくれた。

「いろいろとありがとう」

僕が立ち上がって扉へ向かうと、後ろで体格のいい女性が深く頭を下げるのが分かった。左手で大きく扉を開けると、何だか自分が、自分じゃないような気分になった。

中間の世界と螺旋階段

ホテルを出ると、そこにはそれが当然とでもいうように、案内役の男が立っていた。相変わらずなんともいえない魅力的な顔をしていて、その顔を見た僕は少し安心した。

「さあ、出発しよう」案内役の男はそう言って、やっぱり僕の手を取った。

僕らはいつかのように二人、並んで歩いた。僕にはそれが昨日のことのように、どうしても思えなかつたんだ。それはもうずっと昔、小さいころの思い出のようだった。

「ここはあらゆる物事の中間の世界なんだ。その物事は例えば月と太陽だったり、正と負だったり、幸せと不幸せだったりする。分かるかな？」

男はそう言った。それは本当のことなんだろう。

月と太陽の間にはいくつもの星があり、正と負の間には0があり、幸せと不幸せの間には何か、僕にはよく分からないけれど何か曖昧なものがある。そしてそれこそが、『ここ』のことなんだろう。

僕はまた周りの景色を眺めながら歩いた。波のない海のそばを通り、森の手前で折れた道に入ると、見たことのない色の花が咲いた植物園があった。

雲の上で昼寝をする少女の下を通り、僕の腰くらいの大きさしかない家々の前を通った。

テーマパークはまだまだ遠く、観覧車はほんの小さくしか見えなかった。

「君は」やがて案内役の男は、前を向いたままこう言った。「どうしてここから出ようとすの？」

案内役の男が何でもなしのようによいので、僕は悲しくて、胸がえぐられるような、そんな気分になった。

僕は左手を小さく前後に振って、案内役の男の手を振りほどいた。驚き立ち止まった男に、僕は言う。

「僕と一緒にここから出よう」

遠くでいつかの古ぼけた機関車が汽笛を鳴らした。あの機関車は何のために走り、どこへ向かっているのだろう。

「できない」やがて案内役の男は、何かを吐き出すように言った。その表情は何かを堪えているみたいで、本当に辛そうなものだった。「どうして？」

案内役の男の目は僕を見つめる。僕はまたほんの少しだけ顔を赤くして、男の言葉を待った。

「……僕は、僕はときどきいろんな物事がとても怖くなるんだ。例えば僕は、自分が本当は存在しないんじゃないかって思うことがある。僕は誰かに、ひよっとすると君みたいで、僕を観察する誰かに作られたかもしれないって。君はそんなことを思ったことはない？僕は昨日だって、君と別れる時、必要とされなくなった僕は君がホテルの扉を閉めた瞬間に消えてしまっただけじゃないかって思ったよ。君とここを出るなんてできっこない。だって僕は『ここ』以外では必要とされない人間なんだ」

「そんなことないよ」

「本当にそう言えるかい？もし君がいなくなれば、僕の存在する

意味はなくなるかもしれない」

「でも、そんなこと……」

「怖いんだ」案内役の男は俯いた。「どこに行っても、僕はずっと、ずっとひとりだった。もうあんな思いは……」

異端者、河童の言っていた意味が少し分かった気がした。でも僕は、彼がおかしくなっているとは思わなかった。彼はどこまでもまともだと思った。

僕は左手でゆっくりと、案内役の男の鼻の辺りを撫でた。どうしても、そうしなきゃいけない気がしたんだ。

「君を奥へ連れていこうとした、二度と帰れないように。許してほしい」

そう言った案内役の男の顔は、なんと表現すればいいんだろう。それは深い絶望や哀愁を携えた、それでいてどこか吹っ切れたような、不思議なものだった。その魅力は言葉で説明できる種類のものではないように思えた。

案内役の男はもと来た道を戻り始めた。もう、僕の左手を握ってなんかいなかった。

「ここでお別れだ。二度と会うこともないだろう。さよなら」

目的地らしき場所に着き、男は言った。そこには長い上りの、さびれた螺旋階段があった。

案内役の男は振り返り、そのまま去っていく。僕はその背中に声を掛けようとしたけど、どうしても掛けるべき言葉は出てこなかった。

どうしても、出てこなかったんだ。

決断

僕は長い道のりを歩いている。

頭に浮かぶのは、僕のこと、この世界のこと、そして一人の少女と、案内役の男のことだった。

誰からも愛されず、誰からも必要とされず、誰からも求められな
い……。それでも、人はひとりで、生きていけるのだろうか。生き
ていけなくちゃいけないのだろうか。

排斥された世界の片隅で彼らは何を考え、何を想うのだろう。そ
して、僕は……。

とても寂しかった。誰かに話しかけてほしかった。誰かに触って
ほしかった。僕は今すぐにも叫びだしたかったんだ。

「僕を必要として!」、と。

いつからか僕の間からは涙がとめどなく溢れ落ちていた。前にこ
んなに泣いたのは、もう何年も昔のことだった。僕の涙はいつまで
も止まらずに、このまま不完全な世界を押し流してしまいたいそうだっ
た。

やがて僕の目の前には扉。昨日初めて開けた、建物の大きさの割
に小さな、両開きの扉だ。

その扉を開けると、僕を見つけた河童は小さな目を見開いて驚い
ていた。

「……どうして?」

「案内役の男はどこに住んでいるんだろう? 急に現れたり消えた
りする訳じゃない。彼にだって住んでいる場所があるんでしょう?」

僕の言葉で、河童は僕の真意を見抜いたようだった。河童はやが

て、諦めたように首を振った。

僕はここに残る決断をした。

それが正しいのか間違っているのか、僕には分からない。でも少なくとも僕は、自分の意思でここに来たんだ。それは僕の予感でしかないんだけど、きつと当たっている。僕は誰かに無理やり連れてこられて、今ここにいるんじゃないんだ。

僕は決して、元の世界に戻りたくないわけじゃない。いくら誰も僕を必要としないからといって、やっぱり僕が消えたら心配する人や、困る人がいるんだと思う。世界っていうのは、そういうふうにできている。

だから母親が僕のことを心配すると思うと、本当に、胸が締め付けられるように苦しくなった。

でも僕には、彼らをこの世界にひとりしておくことはできなかった。絶対にそうしたくなかったんだ。

きつと後悔することがあるだろう。僕は自分の右腕があった場所を見やった。そこは相変わらずぽっかりとした空洞で、僕はその意味を、右腕の無い人間になったということの意味を理解する。

「僕は、もう決めたんだ」

そう口に出すとほんの少しだけ楽になって、僕はまだ泣いていたけど、何とか笑うこともできた。鏡は無いけれど、きつと汚い顔をしていることだろう。

「海へ向かう途中に、注意しないと気づかないような、左に曲がる小路がある。彼はそこを進んだ先の丘の上に、ひとりで住んでいるよ」

「ありがとう」

扉を開け、僕は丘を上がる。走って。

丘の上には、赤と、白と、桃色の花が咲いていた。遠くに見える木には、深い緑の葉と、いくつかの黄色い果実が色づいていた。水色の空を二羽の小さな鳥が並んで飛んでいった。

ここに来て初めて、あらゆるものが色づいて、とても現実的に見えた。

それらはまるで光を放っているかのように綺麗で、とても眩しい。そして走り続ける僕は、脳に電流が走るように、唐突にそのことに気がついた。

そうか、ここはもう僕にとっては現実なんだ。僕は『ここ』の一部になっただんだ！

それは決して悲しいことなんかじゃない。『ここ』の一部になった僕らは、誰もひとりになんかならないし、誰も辛い思いなんてしなくていいんだ。

僕は左手を広げる。心地いい風を受けて、駆ける。風の匂いがした。

らくだの涙たち

丘の上の家からは不完全な花と、雲と、海が見えた。不完全な僕らは並んで、よくそれらを眺めた。

ここに来て、もうどれくらいになるんだろうか。もう何年も前から、ずっとここにいるような気がしていた。

僕は明るくなると目を覚まし、暗くなると眠り、その間にいろんな話をしたり、あちこちを散歩して歩いたりした。案内役の男は誰かが案内を必要としない限り、ずっとそこにいた。

僕らはお互いの欠けている部分を埋め合わせるべくして、そこにいたのかもしれない。

それはきつと正しくて、それでいて歪んでいて、どうしようもないくらいに哀しいことなんだろう。

「何か特別なものでも見えるかい？」案内役の男は僕に声を掛ける。「特別なものはないけど、花と、雲と、それから海があるよ」僕はそれに答える。

「あたしは目がいいから魚も見えるよ。ほら、あそこを泳いでる」両足を失くした少女は車椅子の上で、波のない海面を指差して笑っていた。

僕らはいつものように並んで、いつものようにそれらを眺めた。

波のない海が赤く染まり、やがて何も見えなくなるまで。

ここはあらゆる物事の世界なんだ。

空と海の。月と太陽の。そしてたぶん、君と僕の。

らくだの涙の世界。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2862w/>

らくだの涙

2011年10月9日15時58分発行